名作への旅

「日輪」　第36号（3月号）

宇宙空間に長い時間集まった水素の融合によって何十億年も光り輝く太陽のように、心の糧を蓄積しよう。

『史記』は、司馬遷が、五帝から前漢までの歴史をまとめたものである。

諸説あるが、『史記』では、黄帝、顓頊、帝嚳、堯、舜を、五帝と言う。

五帝のあとは、夏、殷、周（春秋、戦国）、秦、前漢と続く。

顓頊の孫が、夏を興した禹である。夏は、桀のときに滅んだ。

帝嚳の次妃である簡狄との間に生まれた契の子が、殷を興した湯である。

帝嚳の正妃である姜原との間に生まれた弃の子孫が、周を興した文王である。名を昌という。

昌は、初め殷の紂王に仕えていた。紂は暴君だった。炭火の上に金属の棒を渡して、罪人を歩かせた。これを、炮烙の刑という。あまりにむごいので、昌は廃止するよう紂王に懇願した。

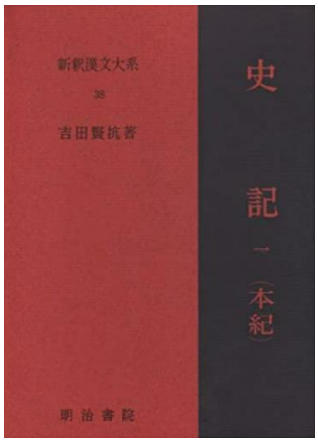
紂王を征伐したのは、文王（昌）ではなく、子の武王である。文王が太公望という軍師を見出したのは有名な話だが、太公望は、武王の殷征伐に貢献し、その功績により斉に封じられた。春秋、戦国時代の大国、斉の始祖は、太公望なのである。

周の幽王のエピソードが変わっている。幽王は褒姒という妃を溺愛した。褒姒は変わった人であった。その母は、竜の吐き出した泡が体に入り、褒姒を身ごもった。褒姒は笑わない人であった。幽王は褒姒を笑わせようとして、烽火を挙げた。これは、異民族の襲撃を知らせる合図だった。当然、諸侯が慌てて集まる。それを見て、ついに褒姒は笑った。そこで、幽王はこれを繰り返した。あるとき、ほんとうに異民族が襲撃してきた。幽王は、烽火を挙げたが、だれも集まってこなかった。幽王は異民族に殺された。子の平王は東に逃れた。このとき、秦の襄公が平王を守った。平王は、襄公の功績をたたえ、諸侯に封じた。これが、秦の大国になるきっかけである。また、この出来事のため周は衰退し、春秋時代に突入する。

ここまでは、「五帝本紀」、「夏本紀」、「殷本紀」、「周本紀」から、ほんの一つまみ取り出してみたものである。「周本紀」は、このあと、春秋、戦国時代の諸侯たちの攻防が中心になる。内容的には、劉向の『戦国策』と重なるところが多い。『戦国策』は、話がばらばらに載っているので、前後関係や人物関係がわかりづらいのだが、『史記』では、非常によく整理されていて、読みやすい。ただ、それでも間違いがあるそうである。焚書坑儒によって、貴重な文献が消滅してしまったためだ。司馬遷の苦労がしのばれる。

「周本紀」に続くのが、「秦本紀」である。特に穆公の記事は、「五帝本紀」からこれまでの、だれよりも長くて、面白い。穆公が君主になったころは、管仲を宰相にした斉の桓公の時代である。穆公は、晋との争いに明け暮れる。穆公自身、兵を率いて何度も出撃している。ある時、晋に包囲され、もはやこれまでかと思っていると、昔、穆公の逃げた馬を食べた三百人が突然現れた。あっという間に晋を追い払い、穆公を救出した。彼らは言った。昔、あなたの馬を食べて、処罰されそうになったとき、あなたは、家畜のためには、人を処罰しないものだと言って許してくれただけでなく、酒までふるまってくださった。その恩義に報いたのですと。穆公の人柄がしのばれる話である。穆公後には、呉越の争いや魯の宰相代行になった孔子の記事などもあるが、今回はここまでにしよう。結局、「五帝本紀」から「秦本紀」までしか触れられなかったが、また、機会があれば、ほかの英雄の紹介もしてみたい。

（国語科　藤生揚亮）



発　行　群馬県立高崎高等学校図書館
発行日　二〇二三年三月六日（月）